

授業力向上推進プロジェクト委員会

所属： 岐山高等学校

氏名： 田中 由美

1 個人テーマ：「読解」から「表現」につながる言語活動とパフォーマンステストによる評価

2 テーマ設定の理由

・「読むこと・聞くこと」のインプットから「話すこと・書くこと」のアウトプットへ

コミュニケーション英語の授業において、教科書の内容理解を自己表現へとつなげる「出口」を明確に設定することで、授業や単元自体への取り組み方が変わってくる。生徒は「〇〇について表現できるようになるために、まずは教科書の表現を使えるようにする。そのために音読練習を繰り返す」など、何のためにどんな学習をするのかが見えてくる。教員は目標を明確に設定しその達成のための授業展開を工夫していく。今年度は主に、パフォーマンステストを通した「表現すること」の評価に焦点をおいて研究、実践していく。

3 研究内容（取組内容）

①読むことから話すこと、そして書くことへ

教科書の各単元の内容を読んで理解した上で、自分の考えを口頭で伝えるところまでを目標とする。話すことを「パフォーマンステスト」として評価する。その後、自分の考えや経験を口頭で伝えた内容を、書くことで文章としてまとめる。さらに、話したり書いたりする際には、教科書で学んだ表現を積極的に活用することができるようにする。

②帯活動と家庭学習

出口活動としてのパフォーマンステストにおいて、全員の生徒が b 以上の評価をとれることをめざして授業計画を立てる。その際に、帯活動として反復的な活動を仕組んだり、家庭学習で音読を習慣化させたりする。

③「評価基準」とそこに到達させるための指導計画

単元の初めに、実施要項を生徒に示し、内容だけでなく評価の仕方も理解した上で、本文の学習に取り組めるようにする。また、教科書の各単元で取り上げられているテーマを、どのように生徒の体験や意見と結び付けてパフォーマンステストにつなげるかを研究する。また、その際の形式(ロールプレイ、質疑応答、ポスターセッション、プレゼンテーションなど)も工夫する。観点別評価に関しては、3観点における a、b、c の評価基準を明確にし、生徒と教員どちらにとっても簡潔で取り組みやすいパフォーマンステストを工夫する。

4 成果

【実践報告】前期末考査でのパフォーマンステスト

(1)科目：コミュニケーション英語Ⅱ

(2)場所：別室または廊下

(3)内容：以下3つのテーマのうち1つについて会話する。(くじ引きで決定)

○Universal Design (教科書) ○Special Day ○Recommendation (ALT の essay writing 授業)

(4)所要時間：一組(二人)あたり2~3分、1クラスあたり1時間(50分)で実施

(5)方法 ・くじでペアを決定し、カードを引いて会話のテーマを選ぶ。

・〈生徒A〉テーマについての意見を述べ、ペアの生徒の質問に答える。

・〈生徒B〉ペアの意見を聞き、内容に関して2つ質問する。・役割を交代して、繰り返す。

※テストを受けていない生徒は教室で自習する。

(6)評価 ・ALT と JTE で 10 ペアずつ評価する。生徒はテスト後、自己評価シートにて振り返る。

・3つのテーマについて、教科書にある Universal Design は定期考査のテスト範囲に合わせた。また他の2テーマについては ALT の授業で essay を書く過程で対話をしているもののうち、比較的自分の体験や

考え、思いを述べやすいもの、またはペアが質問して会話が広がりやすいものを選んだ。

・ペアやテーマについては、事前に打ち合わせができないようくじ引きとした。一方で、初めての相手とも会話ができるように、1週間前のALTの授業で復習を兼ねて練習を行った。

【パフォーマンステストに向けた授業での取り組み】

①リテリング：教科書本文の内容を、既習表現を生かしながら自分自身の言葉でペアに伝える。聞く側は、リテリングの内容に重要なキーワードが入っているかを意識して聞きとる。場合によってはディクテーション活動につなげる。リレー方式ですべてのキーワードを使って表現するグループ活動にするなど、方法にバリエーションをつける。

②自己表現：教科書本文の内容に関連したトピックで、自分の体験や考えを表現させる。まずはペアで「話すこと」から始めさせ、その後書かせる。トピックによってはキーワードだけ先に上げさせてから対話するなど、生徒の実態に合わせて工夫する。

③帯活動としての音読練習

教科書の内容理解と表現を自分のものにするために、授業での帯活動及び家庭学習として音読を定着させる。帯活動としては、個人での音読・黙読、ペアでの音読、本文をフェイドインで黙読、時間を測っての速読、表現定着を確認するための本文テストを実施した。また、①②につなげるために家庭学習での音読活動を定着させる。

・前期末考査で行ったパフォーマンステストでは、自分の考えを相手に「話す」ということができても、それに対して「質問する」ということに生徒たちはかなり苦戦していた。そこで、後期は帯活動における会話の中で相手に尋ねるといったステップを増やした。また、ほとんどの生徒がOpen Questionsを用いて質問できていた。数人がClosed Questionsしか使えていなかったが、答える方が”Yes, because…”のように会話を広げることができていた。そのような良い姿を全体でシェアすることで生徒たちの気づきとなったと感じる。

・リテリングの活動において、以下のような生徒の表現に段階的上達が見られた。①教科書の本文をそのまま抜粋→②キーワードのみを並べて短文で伝える→③接続詞を使って文を繋げたり、順番を変えて文章展開を変えたりする→既習の表現を使って自分自身の言葉で表現する。

・「読むこと」「書くこと」の両方でキーワードを捉えて理解したり表現したりするという流れが定着してきたのは、帯活動だけでなくALTの授業（自身の体験や考えを書く）との相乗効果であると考えられる。

5 課題

①「出口」の活動としてのパフォーマンステストを「入口」で生徒に示す

生徒に対してゴールを示し、めざす姿をイメージさせてこそ日常的な活動や学習の積み重ねに意味が生まれる。今年度パフォーマンステストの実施回数としては定期考査を目安とした2～4回と考えていた。2回以上設定することで「やりとり」と「発表」両方の形式で実施することができる。しかし、実際は一度しか実施できなかった。授業時間数や、教員間の情報共有等で事前準備が十分に行えなかったことが原因である。

②指導計画を段階的に立てる

「指導と評価の一体化」のためには、授業の延長線上にアウトプット活動があり、それを評価することが必要である。しかしすべての単元でパフォーマンステストを行うことは現実的でない。年間を通して評価するためには、教科書全体または単元ごとの題材や言語材料を確認し、それに応じた計画を行う必要がある。今年度2年生のコミュニケーションでは、題材と時期を考え、じっくり授業で取り扱うものと、大まかな概要をつかむ読み方をするものに分けて教科書を利用することができた。1年間もしくは3年間を見通して、学年全体で共通理解を図り、授業計画と改善を今後も行っていきたい。

③過剰な負担なく実施できるパフォーマンステストの工夫

「やりとり」の形式で実施した際、ALTの協力も得て1クラス20ペアを1時間の授業内で実施することができた。これは評価基準を単純明快なものにしてALTとJTEとで共通認識をもって評価できた面も大きい。他に、パフォーマンステスト実施にあたってさらに工夫できるものとして、ICT機器の有効活用が挙げられる。音声録音機能を活用して生徒間で相互評価をさせたり、外部試験のスピーキングテストを参考にしたりすることで、「準備や評価が複雑で大変なもの」というとらえ方を変えていく。そのためにも、教員間で協力し、生徒にとっても私たち教員にとっても負担なく続けていける実施方法を研究、模索していきたい。